

その中から種々な點に於て史的信頼性を確認しようとしてゐる。

ともかく、王や、パドマサンブハバの努力によつて完成されたこの寺院は、當時のチベット思想の上で、舊世界にはあつた新世界の思想を世に宣揚し、聖化し、佛教々理によつて象徴された世界を表現してゐた。そして佛教は今やこの雪深い國に根をおろし、また土地柄に不思議にふさはしい思想となり、同時にこの寺院の出現こそに於て、新しい宇宙觀は古きものゝ上に光被して、やがてそれらを同化し、チベットの全生命が展開して行く、その中心軸となつたものであることが強調される。そして教授によれば、チベットに佛教が弘まつたといふことは、「王の布告」(ティソンデツエン王主宰のもとに、インド及びチベット對シナの僧侶間に論争が行はれた時に由來する)の如きものゝ結果で、佛教がチベットを第二の故郷として決定したわけではなく、布告は佛教がチベットに見出した宗教的世界に對して、何等の重要性を持つてゐるものではない、と述べてゐる。

だが王の布告については、近時フランスの碩學 Paul Deméville 教授が公けにされた、シナ史料「頓悟大乘正理決教」による勞作 *LE CONCILE DE LHASA* があり、その研究と考へ合せてみると面白いと思はれる。ともあれ當時のチベットに於て古來の宗教に對する新宗教が勝利を得る上に、シャーンティラクシタとか、パドマサンブハバのごとき、大厄拂師の介入を必要としたこと、同時にサムエの建立が佛教の基盤を確立するためのものばかりでなく、むしろ當時の事情から複雑な惡魔拂ひ的な意味を有する、長々しい義式を傳承する結果となつたこと等が誌され、最後に、一つの宇宙象徴が、古いもう一つのそれを打破つて得た勝利、それがサムエ寺院の象徴の中に新宇宙の改革として表現せられ、建立にもなつてなされた、禮拜式典によつてもり上つた力を通してよく往時の宗教を葬り、往時の教能力を無害のものとするこゝとができたことを論じてゐる。

(高崎)

日本淨土教成立史の研究

井上光貞著

井上氏は戰後逸早く歴史學研究に「藤原時代の淨土教」なる畫期的な論文を発表され、藤原時代の貴族が何故に淨土教を受容したか、及び其の淨土教が如何なる形態をとつたかについて、藤原貴族の社會的基盤の上より論述されると共に、藤原淨土教が庶民社會を背景とする鎌倉時代の淨土教との異質を具體的な例證を擧げて論じられた。この事は藤原淨土教が鎌倉淨土教への移行形態として見られる原・家永博士と見解を異にするものであつた爲、家永博士より藤原時代と鎌倉時代を連絡する院政時代を無視すべきでない事を以つて藤原から鎌倉への質的飛超について反論がなされた。茲に於て井上氏は、更に院政時代の淨土教を調査されると共に、日本淨土教に關して其の後發表された論文に手を加え、此のたび日本淨土教成立史の研究として出版される事となつたものである。

本書の意圖するところは、序文に於て

述べらるゝ如く、宗教の發達を、(イ)教義と、(ロ)これを説く僧職者、就中その教團と、(ハ)教化の對象でありその教團の物質的基礎でもある信者とその精神生活、の以上三つの因子が主となり従となりつゝくりひろげられる一つの歴史過程として捉え、この三因子についての考察を各時代に均霑せしめることによつて日本淨土教の成立を體系化しようと試みられたものである。この場合、氏は時代を律令時代と藤原時代と及び院政時代の三つに分けて、その一くざり一くざりの移行の過程には、これを可能とする歴史的・社會的諸條件の成熟があり、それに伴つて思想それ自身おのずから形を變えてきた事を示さんとされた。かゝる研究は先年出版された石田充之氏の日本淨土教の研究が教義・思想を主とした上部構造に關する研究であり、家永博士の日本思想史に於ける否定の論理の發達を初めとする諸論攷も上部構造に重點を置いて論述されたのに對し、かえつて堀一郎博士が、我が國民間信仰史の研究に於て示された研究方法に依り、社會的ないわゆる基礎構

造を明らかにし、その立場より上部構造へ及ぶ方向に於て、各時代の教義・思想のよりよき理解を目指して研究されている。而して、かゝる場合陥り易い佛教教義の無理解も、和辻・花山博士等のバックによつて良く咀嚼されていて、その啓蒙するところ極めて多く、今後の日本淨土教研究に、本書は重要な礎石の役割をなす貴重な研究であり、必讀の書として廣く江湖にお奨めしたい。(A5・四四九頁・一四〇〇圓 山川出版社發行)

(細川)

龍樹の淨土教思想

——十住毘婆沙論に對する

一試攷——

長谷岡一也著

この書は、龍樹造十住毘婆沙論本文の客觀的な解讀といふことを基礎にして、龍樹淨土教の綱要を勘へ、淨土の教系が大乗般若の當然一思想形態として了承せられることをインド佛教の立場から論述しようとしたものである。と、巻頭の山口先生の序にいられるが、全體の意趣は

これにつきていへよう。今は著者が特に力説せられる點を若干とりあげてみよう。

十住毘婆沙論を通じて淨土教に關係のあるところは、釋願品に於ける「淨土」に對する龍樹の解釋と易行品に展開せられる易行道の思想とであらう。その「淨土」に對する龍樹の解釋とは、詳しくは菩薩の十大願の中、第七淨土の願の解釋に於いて見られるものであり、それを著者は次の如く三項によつて理解される。

「龍樹によれば、淨土とは(イ)不淨といふこの世間的な態の空じられた境地であり、衆生と行業との二功德を體とするものである。(ロ)そして菩薩によつて淨土が建立せられる所以について、それは、「本願と因縁」による菩薩の大精進によつて建立せられる中道實踐の妙果であり、(ハ)従つて、假設有の最も純化せられたものとなる。それ故に、淨土とは大悲の活動の形成する世界であつたわけである」と。そして、著者が以上の如く龍樹の本文を理解するに際し、(イ)に於いては、衆生と行業を中論第八品に説く作